

# 米国の中の温室(ケンブリッジ)

山岡加奈子

米国滞在は今回が二度目である。最初の滞在地は中西部の中心地シカゴで、学生時代のことだったが、今回は東部の学問の中心地であるケンブリッジ(ボストンの隣)である。一回目の滞在ですでに米国人というものを見てしまったような気がしていたが、今回この認識を大きく改めさせられることになった。「米国は広い!」というのが実感である。

一般に米国人は開放的で物言いが率直といわれている。が、東部、少なくともケンブリッジ周辺の人たちはそうではない。礼儀正しく、決して面と向かって批判をしない。かといって、口で言わずに無言でらみつけるというわけでもない。子どもの行儀の悪さも黙って許容してくれる。「日本に帰ったらこうはいかないよ」と何度息子に言い聞かせたことか(最後の方でマイアミに子連れ出張したが、早速にらまれ、温室の外に出たことを実感した)。

ボストン、ケンブリッジ周辺は米国の都市としては例外的に公共交通機関が発達し、さまざまな施設に歩いて行けるところだが、そのせいか地域社会・商店街ならぬ個人商店の集まる区域も健在である。筆者のように一時的に滞在して移動をする人々もたくさんいる一方で、何世代にもわたって同じ

場所に住み続ける土地の人も多く、いったん土地の人たちのネットワークに入ると、相互扶助の精神に助けられることしばしばであった。

ケンブリッジ市全体ではないが、大学のある地域およびその北側の自治体のいくつかでは、ファストフード・チェーンの出店が禁じられている。おかげで米国にいないのに、Mのマークや赤白の縞柄などのファストフードの店を利用することは、域外に出る限られた機会以外にはなかった。ハンバーガーが食べたければ、「毎朝冷凍していないステーキ用牛肉を自店で挽いて作ります」などと謳っている小さな個人レストランに行かなければならない。おかげで、こういう手作りのハンバーガー(炭火で焼くところが多い)がいかにも美味しいものか、初めて知ることになった。

米国人は自分の国以外の世界にはあまり関心がないと言われている。しかしこれもケンブリッジ周辺の住民には当てはまらない。市民ホールでカリブ海の島国ハイチの民族舞踊を見せる催しがあったときのこと、観客には子どもも小学校のクラスメートの姿も見える。楽器演奏をしている人や踊っている人たちはハイチ人ではなく、ハイチの舞踊や音楽を習う地元の高校の

(多くは白人の)若者たちである。ハイチ料理が振る舞われ、子どもたち向けに、色画用紙でハイチの国旗を作ったり、ヨーグルトの空き箱を利用してハイチの伝統楽器(打楽器)を作ったりするコーナーもあった。礼儀正しく、寛容で、教養高い米国の良心。二年もいればそのうち裏が見えるのではないかと思っていたが、そのようなことはついになかった。筆者の観察力不足によるものかもしれない。いずれにせよケンブリッジは、米国の中ではおそらく例外中の例外的な場所なのだろう。ケンブリッジという温室の中で教育されるこの街の大学生の若者たちは、卒業して温室の外の社会に出た後、多数派の米国社会の流れの中に巻き込まれるのだろうか。

「自分と異なる意見に耳を傾ける姿勢を持ち、あるいは自分の方が間違っているかもしれないという疑念を常に持ち続けるように」。筆者のアドバイザーだった先生が、ハーバード大学の学部生向けの講義の最終日の最後におっしゃったこの言葉は、一五〇人あまりの若い学生たちのスタンディングオベーションに迎えられた。

(やまおか かなこ/アジア経済研究所地域研究センター)